

第43回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

多様性の時代に生まれて

淡路市立東浦中学校 3年 前田 快生

「快は多様性の時代に生まれてよかったな」。これは父が僕によく言う言葉だ。そして僕もその通りだと思っている。数年前から毎日のようにテレビなどで「多様性」という言葉を聞く。このように社会で「多様性」が声高に主張されるようになるよりもずっと前から、僕は最先端の多様性教育を家で受けていたように思う。

僕は小学三年生の頃、体力テストで握力が四キロしかなく、男女含めてクラスで最下位だった。そのことを伝えると、母は言った。「かわいい！ 男が女を守らなきゃなんて考えはもう古いの。快生みたいな力が弱い子は、守ってくれるような強い女子を見つけたらいいのよ。霊長類最強女子とか最高じゃん」。母は僕を一切否定しなかった。当時の僕はペットボトルや瓶の蓋は四つ年下の妹に開けてもらっていて、特に困ることもなかったし、母の励ましもあり、非力な自分を悲観することなく成長することができた。そして今では握力二十六キロ。人並みとまでは言えないが大きく成長した。

また、男子は小さい頃から野球やサッカーなどのスポーツクラブに入る子が多い中、僕がピアノをやりたいと言ったときには、両親は大賛成してくれた。今も昔も運動に関しては超絶へっぽこだが、そんな僕に無理にスポーツをさせようとせず、好きなことだけをやらせてくれて、本当に感謝している。

そもそも人間の多様性とは、性別や人種、宗教、思想、学歴などの違いをお互いに認め合い、それを活かすことで世の中が元気になり、社会が発展していくという考え方である。

なぜ、このような考え方が生まれたのだろうか。それは一九六〇年代シリコンバレー。今でこそグーグルやアップルなどの超大企業がある地域だが、当時は、会社員や芸術家などもいれば、薬物中毒者やハッカーやゲイなど、当時の社会に適応していない人も多くいた。そんなシリコンバレーにはいつしか「世界を変える」という反骨精神が生まれた。世界を変えるため様々な人々が一緒になって議論し、お互いを受け入れ、アイデアを出し合い、あらゆる個性と個性が混ざり合うことにより、コンピューターという新たな世界の中心となるものが誕生した

のだ。多様性とはつまり、マイノリティもマジョリティも互いを受け入れ合って、何も否定しないということが大前提なのだ。

しかし、日本で多様性と言えば、LGBTや障がい者などについて議論されることが多く、本来の意味とは異なった使い方をしているように思う。多様性を盾にして言いたい放題の人や、自分の意見をぶつけるだけで、他人の意見など聞きもせず、互いを受け入れ合うなど考えもしない人もいる。そんな社会であるから、多様性という文字を見るだけで嫌気がさす人もいるのではないか。そしてLGBTなどの多様性を受け入れられない人もいるだろう。実際にその人の本当の気持ちはその人にしかわからない。相手の立場に立ってみよう、想像してみようとしても、正直言って無理なこともある。しかし、わからないからと言って否定するのではなく、相手を思いやり、受け入れるということを忘れてはならない。これこそ、多様性の時代を生きる僕たちの使命だと思うのだ。

僕は多様性は素晴らしいことだと思う。みんなが同じことを考えて同じように生きる世の中なんてとてもつまらないだろう。自分と違う考えに出会うことで、人々は喜びを感じ、多くを学ぶのだと思う。

僕は中学校に入って新たな仲間に出会った。今までに出会ったことのないタイプの人もたくさんいた。どんなときでもみんなをまとめてくれて「これぞ真のリーダー」と思える人や、絶対に周りに流されず自分を強く持っている人、口は悪いけれど面倒見が良くて頼りになる人など。いろいろな人に日々刺激をもらって僕は生きている。これから先の未来、高校、大学、社会人と、どんな人に出会えるだろう。考えただけでワクワクする。

生まれたときから多様性の時代に生きる僕たちが、いい歳の大人になる頃には、きっと多様性の考え方はしっかり根付いていて、今よりみんなが生きやすい社会になっていると思う。

僕の「快生」という名前は「快く生きてほしい」という願いを込めて両親が付けてくれた。僕は自分の名前をととても気に入っている。そして僕は、誰もが快く生きることができる社会になることを願っている。そのためにも僕は今まで通り、相手を知ることから始め、相手を思いやる気持ちを忘れず、困っている人がいたらそっと手を差し伸べることができる人間でありたいと思う。そして明るい未来を夢見て、僕はこれからも一生懸命に学び続ける。未来は僕らの手の中だ！